

接頭辞subの多義性

— 認知意味論の観点から —

Polysemy of Prefix *sub*
: A View from the Perspective of Cognitive Semantics

川村 義治
Yoshiharu Kawamura

〈要旨〉

形態素は意味の最小単位である。接頭辞は語の語幹と呼ばれる部分の前に位置する形態素である。接頭辞 *sub* は「下に」という意味のラテン語の前置詞 *sub* に由来する。本稿は接辞 *sub* が「下に」のほか、「被って」「下から（上に）」「潜んで」「減って」「後に」「細かく」の六つの意義を持つことを明らかにした。そして、「下に」を基本義とするそれらの七つの意義が日常生活における経験や認知作用に動機づけられていることを論証した。また、それらの多義の生成がこれまでの認知意味論のなかで考察されてきた概念メタファーと一致することを示した。それゆえ、接頭辞 *sub* の多義的な概念は英語の概念体系に沿うものである。例えば *sub* の「被って」という概念は *subject* という語をつくり、「被支配は下」という構図は *He is under my control* といった文と共通する。このような統一性は、意味の最小単位である形態素、語、句、文といった統語形式は連続体であり、形式間に本質的な違いはないとする認知意味論の知見を支持するものである。

〈キーワード〉

接辞, 多義, 認知

1 はじめに

なぜ接辞なのか。“Grammar is meaningful”⁽¹⁾ であると、Langacker は述べる。これは、すべての文法形式には意味があるという認知文法の言語観を示す言葉である。

従来の英語学では、「句レベル、文レベルの意味は、それを構成する語彙の辞書的な意味と句構造、文構造にかかわる文法規則の関数」⁽²⁾ として考えられていた。一方、認知文法では、「語彙レベル、句レベル、構文レベル等どのレベルの言語単位も認知主体の概念化 (conceptualization) の認知プロセスを反映する意味に対応」⁽³⁾ すると考える。したがって、意味の最小単位である形態素から始まり、語、句、節、構文という文法単位はゆるやかな連続体であり、それぞれの間には本質的な違いはないとする。

認知主体による概念化とはものの捉え方のことである。そこには、「慣習的に有意なイメージの喚起や、人の感情、運動感覚のあり方などが関わってくる。また、言語文脈や社会の価値体系・信念体系といった、経験を背後から支えるファクタ」⁽⁴⁾ も関わる。つまり、言語は形式も意味も認知主体としての人間の外部世界での経験に動機づけられて

いるという観点から言語現象を考察するのが認知言語学のアプローチである。本稿ではこのような言語観のもと、言語の最小意味単位である接辞に注目する。具体的には接頭辞 *sub* を取り上げてその多義的な概念内容を考察する。

2 先行研究から

2-1 接辞 *sub* の定義

英語の接辞には、アングロ・サクソン系のものと古フランス語を経由して中英語に混入してきたギリシャ語・ラテン語系のものがある。接頭辞 *sub* は、空間的な下方を意味するラテン語の前置詞 *sub* に由来する接辞である⁽⁵⁾。したがって、*sub* の基本的な意味は空間における下方である。語形成においては、後続する要素に名詞 (例 *subculture*)、形容詞 (例 *subconscious*)、ラテン語由来の動詞 (例 *submit*) をとる。その際、後続する語幹の発音と同化して発音と綴りに変化が起きることがある。c, f, g, p, r の前ではそれぞれ *suc*, *suf*, *sug*, *sup*, *sur* に変わる。さらに、m の前では *sum* または *sub*, s の前では *sus* または *sub* である。

Oxford Dictionary of English Etymology (1966, Oxford University Press, p. 879) は、接頭辞 sub の概念を最初に “under, close to, up to, towards” と要約し、九つの意味に分けて詳しく説明する。1 「空間的下方」の意味, “under, underneath, below, at the bottom” (of) 2 「従属」を表す意味, “subordinate, subsidiary, secondary” 3 数学における「逆比例あるいは逆関数」としての意味 4 空間的な下位から「平面的後続」, あるいは「近接」の意味, “next below or after, near or close (to)” 5 「不完全性」の意味, “incomplete (ly), imperfect (ly), partial (ly)” 6 「隠された」という意味, “secretly, covertly” 7 「下から上方へ」という意味, “from below, up (hence) away” 8 「代わりに」という意味, “in place of another” 9 「加える」の意味, “in addition” である。

『ウィズダム英和辞典』第2版(井上永幸, 赤野一郎編, 2007, 三省堂, p. 1800) は、sub の意味を 1 「下の」, 「下にある」 2 「副の」, 「補」 3 「分割」, 「細分」 4 「亜」, 「類」 5 (化学) 「弱の」, 「低い」の五つに分け、submarine (潜水艦), subagent (不代理人), subsection (下位区分), subtropical (亜熱帯), subacid (弱酸性の) をそれぞれの例として挙げた。空間における下方という中心概念が四つの多義を獲得しているわけである。このような分類から、空間における「上」- 「下」という対立概念が「主」- 「従」あるいは「副」, 「大」- 「小」, 「本」- 「亜」あるいは「準」, 「強」- 「弱」の概念対立で捉えられていることがわかる。

2-2 従来の多義記述における問題点

接頭辞 sub は名詞, 形容詞, 動詞の語根に付いて様々な語を形成する。その際、接頭辞が担う意味も多様である。したがって、submarine のように接辞 sub と語幹 marine (海の) のそれぞれの意味から語全体の意味が明白な語もあれば、sub と tle (編む) から成る subtle (微妙な) のように、一見したところでは接辞と語幹の意味の和から語全体の意味を推し量れない語もある。これは、意味が多様な要因により動機づけられているうえに、接頭辞 sub が多義化していることも一因である。

認知意味論のアプローチは、単一の形態素の複数の語義間に何らかの動機づけがあると推測する。Eve E. Sweetser は、「語の意味は、必ずしも客観的に『同じ』事象や実体の集まりではなく、私たちの認知体系が適切な形で結びつける事象や実体の集まりである」⁽⁶⁾ と指摘し、「語が有する複数の共時的な意義は、動機付けのあるやり方で互いに関連づけられている」⁽⁷⁾ と述べる。さらに、意味のカテゴリー化は、「世界に存在する区分に対する私たちの命名法のみ依存しているのではなく、世界に対する私たちのメタファー的・メトニミー (metonymy) 的な構造化

にも依存している」⁽⁸⁾ と述べている。つまり、多義を含む意味のカテゴリー化は人間の主体的な経験を人間の認知様式に基づいて分類した結果であると言える。

前述したように、*Oxford Dictionary of English Etymology* やウィズダム英和辞典には、接頭辞 sub の多義の意味が詳細な記述されていた。問題は個々の語義が関連づけられておらず、どのような根拠からそれらの多義が導き出されたのか不明な点にある。本稿は次章で接頭辞 sub の多義を動機のあるやり方で関連づけて、英語の概念体系の広がりの中で接辞 sub の意味の位置づけるという試みを行う。

3 接頭辞 sub を持つ語彙の分析

3-1 語彙の選出

分析対象語は、次のように選出した。ウィズダム英和辞典は、見出し語約58,400語を重要性の度合いから5段階に分けている。対象語に選出した語は、第1段階の「中学必修相当語彙」から第4段階の「一般語彙」までの約15,400語のうちから、接頭辞 sub を持つと判断される45語である。これらの語は普段の生活で使用されている日常語彙と見なしていいだろう。ただし、派生語は対象外とした。なお、〈〉で囲まれている語義は、上記のウィズダム英和辞典に記載されている語義を参考にしている。

3-2 分析

多義の提示や多義の関連を分かりやすく提示するために漢語一語を用いて考察をすすめる。なお、接頭辞 sub 以外の要素は本稿では考察対象外であるので一括して扱っている。

1 subcommittee

〈小委員会, 分科会〉。語源は sub (下の) + committee (委員会) である。

下方にあるモノは小さく見えるという日常の経験に基づけば、概念「下」が「細」という概念を持つことには十分な動機づけがあると考える。換言すれば、概念「細」は「下」で表記されている。

2 subconscious

〈潜在意識の(中)にある, 意識下の〉。語源は sub (下に) + conscious (意識の) である。

sub の意味は、*Oxford Dictionary of English Etymology* における六番目の意義 “secretly, covertly” と重なる。別のモノの下にあるのでさえぎられて見えないという事態は、日常よく経験する。存在するが隠れて見えないのである。これが「下」が「潜」の意を生む動機づけである。sub が「潜んで」という概念を表して、subconscious は普

段の生活のなかでは自覚できない意識つまり「潜在意識」に関する意味を表す。したがって、概念「潜」は「下」で表わされる。

反対に、「上方」の方向づけにはそれまで見えなかったモノが現れるという意義が結びつく傾向がある。句動詞 come up, turn up における up は出現の意を表す。G. Lakoff & M. Johnson は、英語における CONSCIOUS IS UP; UNCONSCIOUS IS DOWN⁽⁹⁾（「意識は上」「無意識は下」）という概念メタファーの存在を指摘している。

「証拠があがる」と言うように、日本語の「あがる」にもく人目につく＞あるいはく明るみに出る＞といった認知的な意味があり、興味深い。

3 subdivide

＜～をさらに細かくわける、～を細分（割）する＞。語源は sub（下に）+divide（分ける）で、sub の概念は「細」である。

4 subdue

＜～を鎮圧する、制圧する＞。語源は sub（下に）+due（導く）である。語幹 due は duct や duce とともに「導く」という意味のラテン語から由来する。

G. Lakoff & M. Johnson は、HAVING CONTROL or FORCE IS UP; BEING SUBJECT TO CONTROL or FORCE IS DOWN⁽¹⁰⁾（「支配するまたは力を持つことは上」「支配されるまたは力に屈することは下」）と述べている。確かに、接頭辞 sub の意は支配の圧力を「被っている」という意味にとれる。G. Lakoff & M. Johnson は、身体の大きさと力の大きさの相関を動機づけにあげている。社会構造を身体の大小の関係に見立てると、権力は上から下への圧力と捉えられる。したがって、「被」支配の概念は「下」で表される。

5 subject

＜話題、科目、～の影響を受けやすい、～を服従させる＞。語源は sub（下に）+ject（投げる）である。

『英語多義ネットワーク辞典』（2007, 小学館, p. 941）は、中心義を「(国家の) 支配の対象となる人」と規定する。そのうえで、何かの対象になるという図式から、議論の対象としての「話題」、勉強の対象としての「科目」、文における話題の対象としての「主語」、絵などの「対象」、実験の「対象」などの意味を導き出している。支配を受けるあるいは意識の対象となるという意味で、sub の概念は「被」である。

6 subjunctive

＜仮定法＞。語源は sub（下に）+junctive（加える）である。

追加するという意の後期ラテン語に由来し、従属する（subordinate）という意のギリシャ語 *hupotaktikos* をなぞった言葉。『英語語源辞書』（寺澤芳雄編, 1997, 研究社, p. 1371）によれば、このような背景には仮定法が「本来従属節に属するものと考えられていた」ためであるという。sub の概念は「被」である。

7 sublime

＜荘厳な、卓越した、～を昇華させる＞。語源は sub（下に）+lime（鴨居）である。

英語語源辞書は語源を “reaching up to below the lintel”⁽¹¹⁾ と説明する。つまり、何か（おそらく人の背）が、まぐさ（出入り口の上部の横木）の下までとどいているという意味である。その意味から高い位置（状態）に達しているという新たな意味が生まれたと推測される。

8 submarine

＜潜水艦、海底の＞。語源は [下に+海の] なので、sub は空間的な「下」を表す。

9 submerge

＜～を水中に入れる＞。語源は sub（下に）+merge（浸す）である。sub の概念は「下」のである。

10 submit

＜人を服従させる、～を提出する＞。語源は sub（下に）+mit（送る）である。＜服従させる＞という意と＜提出する＞という意の関連性が捉えづらいが、ウィズダム英和辞典は、(官庁や権威者などに意見や裁定などを求めて案や文書などを) 提出すると説明する⁽¹²⁾。両義は「支配-被支配」の認知構図で一致する。したがって、submit における sub の概念は「被」である。

11 subordinate

＜下位の、従属した立場の、部下＞。語源は sub（下に）+ordinate（置く）である。sub の概念は「被」である。

12 subpoena

＜召還状、出頭命令＞。語源は sub（下に）+poena（刑罰）で、法の支配のもとにあることを示す。したがって、sub の概念は「被」である。

13 subscribe

〈定期購読する, 加入する, 賛同する, 寄付する〉。語源は sub (下に) + scribe (書く) である。文書の下部に姓名を書いて署名することで, 〈賛同する〉〈寄付する〉等の意味を獲得する。sub の概念は基本義の「下」である。

14 subsequent

〈その後の, 続いて起こる, (順番が) 次の〉。語源は sub (下に) + sequent (続く) である。

sub の概念は, Oxford Dictionary of English Etymology が指摘する “next below or after, near or close” の意義で説明できる。あるモノの表面に別のモノがある状態は, 俯瞰する人の目から見ると「上」と「下」の関係であると同時に両者が前後に重なって見える。したがって, sub の概念は「後」あるいは「次」という概念を生む動機づけになると考える。「後」という概念は「下」で示される。

日本語でも「下」には「前の対」という概念があり, 「後ろに下がる」という言葉は全く矛盾なく日常的に使用されている。

15 subservient

〈従属的な, ~よりも重要性が低い〉。語源は sub (下に) + servient (仕える) である。subordinate と同じく支配-被支配という認知図式において捉えられるので, sub の概念は「被」である。

16 subside

〈(声・音・激情・悪天候などが) 徐々に静まる〉。語源は sub (下に) + side (座る) である。

G. Lakoff & M. Johnson は, MORE IS UP; LESS IS DOWN (13) (「多は上」「少は下」) という認知様式を指摘する。モノの表面が量の多少により上下するのは, 日常の当たり前の経験である。モノの量の増減と上下関係は共起する。したがって, 声や音が徐々に静まるとは音量や音量が減ることなので, sub の概念は「減」である。

17 subsidy

〈補助金, 援助金〉。語源は sub (下に) + side (座っている) である。subside の語源とほぼ同じである。ただし, 接頭辞 sub の捉え方は異なる。

上下にある二つのモノの関係を, 下のモノが基盤となつて上のモノを支えると見なすならば, 〈支援〉という概念を生む動機づけになる。その場合, sub の概念は「下から(上に)」となる。subside と subsidy の語源は同じような構成であるにもかかわらず sub の概念が異なるのは, 上記のような捉え方の違いによる。飲み物が半分だけ入っている瓶

は, half-empty (半分しかない) ととも half-full (半分もある) とも言えるように, 同じ対象でも認知主体がどう捉えるかで意味は異なる。sub の概念は「上」である。

18 subsist

〈(少量の食料・金などでどうにか) 生きていく, 生存する〉。語源は sub (下に) + sist (立つ) である。

英語語源辞書 (p.1372) は, 由来するラテン語 *subsistere* の意味を “cause to stand” であると説明する。G. Lakoff & M. Johnson は英語の意味づけにおける HEALTH AND LIFE ARE UP; SICKNESS AND DEATH ARE DOWN⁽¹⁴⁾ (「健康と生命は上」「病気と死は下」) という概念メタファーを指摘する。自らを支えるあるいは立っているという身体的な在り方から「生存」の意を動機づけるのである。この概念図式の基づくならば, 接辞 sub は「下から(上に)」という概念を表していると考えられる。また, 上記の「少量の食料・金などでどうにか」の意義は, 「少は下」という概念図式とも一致するので, sub が「上」と「減」の両義で subsist の意味生成に貢献しているとも解釈できる。sub の概念は「上」である。

19 substance

〈物質, 重要性, (本質的な) 内容〉。語源は sub (下に) + stance (立っている) である。

英語語源辞書 (p.1373) によれば, 由来するラテン語の意味は “stand firm or under” である。さらに時代がさがつて後期ラテン語の *substantia* になると “being, essence, material property” という意味になる。『イメージ活用英和辞典』(政村秀實, 2008, 小学館, p. 633) は, この語の意味を「(表面下にある) 実質, 本質, 物質」と説明する。モノは表面によって他から切り離されているので, しばしば「容器のメタファー」で捉えられる。つまり, 中身がモノの存在を支える本質であり, 表面はいわば意味のない入れ物にすぎないとする見方である。諺 beauty is only skin-deep (見た目より心) はまさにその見方を反映している。したがって, sub の概念は「潜」である。

20 substitute

〈~の代わりに使う, ~の代わりにする〉。語源は sub (下に) + stitute (立たせる) である。

ある対象が本来あるべき対象に「後続する」と捉えるならば, 「代わりに」という意味の生成を動機づけられる。「二次的あるいは副次的」であるという概念は, G. Lakoff & M. Johnson の HIGH STATUS IS UP; LOW STATUS IS DOWN⁽¹⁵⁾ (「高い地位は上」「低い地位は下」) という概念メタファーの構図と一致する。したがって sub の概念は

「後」である。

21 subterranean

＜地下の＞。語源はsub(下に)+terranean(地面)である。この組み合わせはundergroundと同じである。したがって、subの概念は「下」である。

22 subtle

＜微妙な、複雑でよい＞。語源はsub(下に)+tle(織る)である。これは“under the warp”⁽¹⁶⁾、つまり「縦糸の下に」という意味である。縦糸の下に横糸を通す作業を通じて細かく織って「手の込んだ」⁽¹⁷⁾状態に仕上がる。

ちなみに、形容詞のfineには「すばらしい、上等な」という意味と「細かい」「細い」という意味がある。このような両義は、織目のきめの細かさが外見の優美さや品質の上等さにつながるものが動機づけになっていると推測する。ちなみに、反対語であるcoarseには「きめの粗い」という意味と(品質が)「粗末な」という意味が同居する。

23 subtract

＜～を引く、減じる＞。語源はsub(下に)+tract(引く)である。「少は下」という概念図式がそのままあてはまる。subの概念は「減」である。

24 suburb

＜郊外＞。語源はsub(下に)+urb(都市)である。ウィズダム英和辞典はsubを「副に」と説明する。一方、Oxford Dictionary of English Etymologyは、四番目の語義“next below or after, near or close (to)”の例としてsuburbを挙げる。

「上」「下」の表現は、多義的である。例えば、副詞upは話し手や中心となる場所に「向かう」という意義を持つものに対して、副詞downは話し手あるいは中心から「離れる」という意義を持つ。位置的な観点から言えば、suburbは都市の中心から外れた、いわば背後に位置する場所である。したがって、subの概念は「後」であると考えられる。

日本語にも上下表現にも似たような意味があり、「あがる」は地方から上方へ行くことを表し、「くだる」は都から地方へ行くことを表す。

25 subvert

＜(体制などを)覆す＞。語源はsub(下に)+vert(回す)である。ある対象を倒すことなので、接辞subの概念は「下」である。力の方向はoverthrowと重なる。一方upsetは力が「下から上に」働いている。いずれも、安定した上下の関係(秩序)を覆すという意味である。

26 subway

＜地下鉄＞。語源はsub(下の)+way(道)である。subの概念は文字通り「下」である。

27 succeed

＜(～すること)に成功する、～の後を継ぐ＞。語源はsub(下に)+ceed(行く)である。

suc(sub)の概念を「後」と捉えると、「後ろから行く」から「継承する」の意味につながる。英語語源辞書(p.1374)によれば、「続く」「続いて起こる」「～の後を継ぐ」が最も古い意味である。英語多義ネットワーク辞典(p.942)は、活動が次々と続くことからうまく事が運ぶ(成功する)という概念が動機づけられると説明する。原因—結果のメトニミーである。したがって、suc(sub)の概念は「後」である。

28 succinct

＜簡潔な＞。語源はsub(下に)+cienct(締める)である。帯などで体や服などを巻き上げれば全体の体積が縮まる。この経験が「簡潔性」の概念を動機づけると考える。したがって、suc(sub)の概念は「減」である。

29 succumb

＜屈する、倒れる＞。語源はsub(下に)+ccumb(横たわる)である。suc(sub)の概念は「下」である。

30 sudden

＜突然の＞。語源はsub(下に)+den(行く)である。ウィズダム英和辞典は、語源を「こっそり行く(来る)」と解釈する。「こっそり行く」行動は出来事の「突然性」につながる。したがって、sud(sub)の概念は「潜」になる。

31 suffer

＜～を患う、悩む、被害を被る、経験する＞。語源はsub(下に)+fer(運ぶ、耐える)である。「支配されるまたは力に屈するは下」の認知図式にしたがってsuf(sub)が「被」の概念を持てば、上記の意味は動機づけられる。undergoも「(つらいこと・変化など)を経験する」という意味を持つが、これも同じ認知図式で説明できる。

32 suffice

＜十分である＞。語源はsuf(下に)+fice(成す)である。語源的には後述するsupplyと重なる。足りないところが満たされているので「十分である」。したがって、subは「減」を表す。ただし、下から上に満たすという捉え方もできる。

33 suffocate

〈窒息(死)させる〉。語源は sub (下に) + focate (のど) で、のどが狭くなることを表している。したがって、suf (sub) の概念は「減」である。

34 suggest

〈～を提案する, 推薦する, 暗示する〉。語源は sub (下から) + gest (運ぶ) である。「暗示する」の意味から考えると, sug (sub) の概念は「潜」と捉えられる。

35 summon

〈(会議・法廷などに) 来るように命じる, (人を) 呼び寄せる〉。語源は sub (下に) + mon (警告する) である。ウィズダム英和辞典は、語源を「こっそり警告する」と解釈する。ただし、現在の意味は公の場所への正式な出頭命令または依頼であるので, sum (sub) の概念は「被」と捉える。

36 supply

〈供給する, 供給量〉。語源は sub (下に) + ply (満たす) である。

足りないところを補うと解釈すれば, sub の概念は「減」である。ただし, suffice とおなじく「下から上に満たす」という捉え方もできる。

37 support

〈～を支持する, 扶養する〉。語源は sub (下に) + port (運ぶ) である。

英語多義ネットワーク辞典 (p. 946) は、「荷物などの下に身体を置いて運ぶ」という意味から「支える」という意味に拡張したと説明する。下から上に支えるので, sup (sub) の概念は「上」になる。

38 suppose

〈～であろうと思う (考える), ~することになっている〉。語源は sub (下に) + pose (置く) である。

Eve E. Sweetser は、コミュニケーション行為を話し手から受け手への物のやりとりという隠喩的な構造で捉えて, suppose と propose の概念を考察した⁽¹⁸⁾。頭の中にある (suppose) 考えを相手に差し出す (propose) のである。sub の概念は「潜」で表される。

39 suppress

〈鎮圧する, 規制する, 抑える〉。語源は sub (下に) + press (押す) である。支配—被支配は空間の上下の概念で捉えられるので, sup (sub) の概念は「被」である。

40 susceptible

〈影響されやすい, かかりやすい〉。語源は sub (下に) + ceptible (取る) である。sub の概念が「被」であれば, susceptible の意味は動機づけられる。

41 suspect

〈～であろうと思う〉。語源は sub (下から) + spect (見る) である。「こっそり」と相手の様子を伺うので, sus (sub) の概念は「潜」である。

42 suspend

〈～を停止 (中止・中断) する〉。語源は sub (下に) + pend (つるす) である。sus (sub) は「下」である。

43 suspicion

〈疑惑, 不信感〉。語源は sub (下から) + spect (見る) である。suspect 同様「こっそり」と相手の様子を伺うので, sus (sub) の概念は「潜」である。suspicion と suspect は同じラテン語から由来する語である。

44 sustain

〈持続させる, 扶養する〉。語源は sus (下に) + tain (保つ) である。下から支えるという意味なので, sus (sub) の概念は「上」である。

45 souvenir

〈記念品, みやげ, 思い出の品, 形見〉。語源は sub (下に) + venir (来る) である。つまり、「下から (上に) 来る」という意味なので、「現れる」(come up) という意味になる。「思い出の品」とは、それを見るたびにがある記憶が蘇る品のことであるから, sub の概念は「潜」である。

4 考察

本稿の目的は、接頭辞 sub の多義的な概念を英語の概念体系に照らして考察しながら、動機づけのある方法で関連づけることにある。sub の多義な意味は、これまで多くの辞書や研究書で詳細に検討されている。問題は、それらの意味の間になんらかの関連性があるのか、またあるとすればどのように動機づけができるかという視点が抜けている点である。それゆえ、個々の意義は個別に理解できてもそれ以上 sub の理解が深まらなかった。

そのような記述内容の背景には、従来の言語観が反映している。二十世紀半ばまでの伝統的な文法では、文の考察は単語単位が主であった。形態素の分類はさかんになったが、語や形態素の多義的な意味の考察は後回しになっていた。その後、語彙の概念は「意味の差異」という観点から

分析が行われたが、意味の考察はあくまで語彙内部の概念分析に終始した。形態素と語彙や句や文という統語形式を同列なものとして扱い、形態素の多義的な意味の基盤を考察する研究は、言語の意味は人間の身体的な経験や認知作用に基盤を持つという認知言語学が登場してようやく条件が整ったと言える。

本稿では、subの多義的な概念を考察するための手がかりとして、漢語一語を用いて分類した。考察の過程から浮上した語は、「被」「下」「潜」「減」「上」「後」「細」の七語である。対象語45語に組み込まれている接頭語subの概念はこの七語の概念に当てはまると以下のように分類された。

表1 七つの概念と語数

概念	被	下	潜	減	上	後	細
数	12	8	8	6	4	4	3

表2 概念と所属する語彙

概念	語 彙
被	subdue, subject, subjunctive, submit, subordinate, subpoena, subservient, succumb, suffer, summon, suppress, susceptible,
下	sublime, submarine, submerge, subscribe, subterranean, subway, subvert, suspend
潜	subconscious, substance, sudden, suggest, suppose, suspect, suspicion, souvenir
減	subside, subtract, succinct, suffice, suffocate supply
上	subsidy, subsist, support, sustain
後	subsequent, substitute, suburb, succeed
細	subconscious, subdivide, subtle,

一番目の「被」には最多の12語が属する。「被」は何らかの力関係により支配—被支配の関係が成立していることを指す。subdue, subject, subservient, succumb, suppressは、権力・権威が影響を及ぼすという意味を持つ。submit, subpoena, summonの意味は、権威の上下関係が前提である。suffer, susceptibleは心身の面で何らかの影響を被る状態を表している。subjunctive, subordinateは主となるものに従うという意味でこの分類に入る。

では何かの影響を被ることはなぜ「下」の概念で示すことができるのか、言い換えれば、「下」がなぜ「被支配」の概念につながるのか。多くの例(He is *under* my control, etc.)とともに「支配されるまたは力に屈することは下」という概念メタファーの存在を指摘したG. Lakoff & M. Johnsonは、身体的な大きさと力の関係をその根拠にあげている。モノの大きさと圧力との相関である。

二番目の概念は「下」である。接辞subの概念が基本義の空間的な「下」のままである語は8個である。submarine,

submerge, subterranean, subway, subvert, suspendの6語は、いずれも語の要素から語全体の意味が読み取りやすい語である(残りのsublimeとsubscribeは換喩が働いているので、全体の意味は取りづらい)。見方を変えれば、45語の八割以上になる37語では基本義以外の意味を表しているため、その多義的な概念を理解しないと接頭辞subの役割は理解しがたいのである。

三番目の概念は「潜」である。この概念には7語が属する。それぞれ、下に位置するので上からははっきりと知覚できない、あるいは上から見えにくいので下でこっそり事を行うという意味を表している。各語の意味形成は、下にあるものは上からは見えにくいという日常の経験に動機づけられていると考える。例えば、subconsciousとsouvenirは、普段は意識にのぼらない思考や感情が「下」に潜んでいることを示している。これは先に示したG. Lakoff & M. Johnsonの概念メタファー“CONSCIOUS IS UP; UNCONSCIOUS IS DOWN”(「意識があるは上」「意識がないは下」と重なる。

四番目の概念は「減」である。「下」と関連する「減」の概念は、G. Lakoff & M. Johnsonの概念メタファーMORE IS UP; LESS IS DOWN(「多は上」「少は下」)で説明される。モノの量が減れば容積が小さくなり低くなるのは日常のありふれた経験である。

五番目の概念は「上」で、「下から(上に)」という意味である。「下に」を意味する接辞subがなぜ「上」という反対の概念と結びつくのか。主体の視座が下に位置して下から見上げるからと推測する。subsidy, subsist, substance, support, sustainはいずれも下からモノを支える・立たせるという動きから<支援・存在>の概念を表している。G. Lakoff & M. Johnsonの概念メタファーを借りるならば、HEALTH AND LIFE ARE UP; SICKNESS AND DEATH ARE DOWN⁽¹⁹⁾(「健康と生命は上」「病気と死は下」)である。

六番目の概念「後」は、一見したところ「下」と結びつかないように思われるが、日本語でも「後ろに下がる」という表現が日常使われるように、「下」と「後」は関連する概念である。上下に重なるモノは上から見ると前後に重なるモノとして捉えられる。subsequent, succeedは<後に>続く、substituteは<二番手として>立つ、suburbは都市の<背後に>位置する場所である。

七番目の概念「細」には3語が入る。「下」が「細」を表すのは、上から見ると下にあるモノが小さく見えるので「細かい」「細かく分かれている」という概念を動機づけると考える。

以上、接頭辞subを持つ45個の英単語を七つの概念に分け、その概念を考察した。「下」以外の六つの概念は、

いずれも日常の経験や認知作用に動機づけられて「下」という概念と関連する。

なお、今回の対象語には Oxford Dictionary が示唆する “imperfect (ly) or incomplete (ly)” の意にすんなり当てはまる語は見当たらなかった。「インド亜大陸」の英語表記が the Indian subcontinent であるように、この意義は sub の重要な意義のひとつであり、substitute の名詞の意義「補欠」は一部重なる。したがって、本稿は七つの概念を考察したが、「亜」を加えると接頭辞 sub には八つの概念が設定できる。

5 まとめ

本稿は接頭辞 sub の多義的な概念構造を考察した。対象語は、普段の日常生活語と推測される約15,000語に属する語彙である。多義の分析は、概念を分かりやすく示すために漢語一語で提示した。考察の結果、対象語に含まれる sub には次の七つの意義があることが示唆された。

1) 基本義「下に」; sub は「下に」を意味するラテン語の前置詞に由来する, 2) 「被って」; 下は上から何らかの影響を被る, 3) 「潜んで」あるいは「秘かに」; 下にあるモノは上にあるモノに隠れて見えにくい, 4) 「下から上に」; 下から上を支えるあるいは意識する, 5) 「減って」; モノが減れば量が下がる, 6) 「後に」; 上下に重なるものは上から見ると前後に重なって見える, 7) 「細かく」あるいは「細かく分かれて」; 下にあるモノは小さく見える。漢語で表記すると、「下」「被」「潜」「上」「減」「後」「細」になる。

「下」を基本義とするこれら七つの概念は、日常の経験や認知採用によって動機づけられることを論証するとともに、それらの多義がこれまでの認知意味論のなかで考察されてきた概念メタファーと一致することを明らかにした。したがって、上記で示した接頭辞 sub の多義概念は英語の

概念体系に沿うものである。このような概念の体系性は、意味の最小単位である形態素、語、句、文といった統語形式が連続体を成しており、形式間に本質的な違いはないとする認知意味論の知見を支持するものである。

注

- (1) Langacker, Ronald W., 2008, *Cognitive Grammar*, Oxford University Press, p. 3
- (2) 辻 幸夫編, 2001, 『ことばの認知科学事典』, 大修館書店, p. 20
- (3) *ibid.*
- (4) 吉村公宏編, 2003, 『認知音韻・形態論』, 大修館書店, p. 201
- (5) 西川盛雄, 2006, 『英語接辞研究』, 開拓社, p. 129
- (6) Sweetser, Eve E., 澤田治美訳, 2000, 『認知意味論の展開』, 研究社, p. 13
- (7) *ibid.*, p. 14
- (8) *ibid.*, p. 13
- (9) Lakoff, G. & Johnson, M., 1980, *Metaphors We Live By*, The University of Chicago Press, p. 15
- (10) *ibid.*
- (11) 寺澤芳雄編, 『英語語源辞書』, 1997, 研究社, p. 1371
- (12) 井上永幸, 赤野一郎編, 『ウイズダム英和辞典』第2版, 2007, 三省堂, p. 1802
- (13) Lakoff, G. & Johnson, M., p. 15
- (14) *ibid.*
- (15) *ibid.*
- (16) 寺澤芳雄編, p. 1373
- (17) 井上永幸, 赤野一郎編, p. 1804
- (18) Sweetser, Eve E., 澤田治美訳, p. 30
- (19) Lakoff, G. & Johnson, M., p. 17

参考文献

- 瀬戸賢一編, 『英語多義ネットワーク辞典』, 2007, 小学館
政村秀實, 『イメージ活用英和辞典』, 2008, 小学館